

グループプレイセラピーにおける保護者支援

飯塚 一 裕 (愛知教育大学障害児教育講座)

Support for parents in group-play therapy

Kazuhiro IIZUKA (Department of Special Education, Aichi University of Education)

要約 本論文では、愛知教育大学教育臨床総合センター発達支援研究部門内の発達支援相談室で実施しているグループプレイセラピーの実践に関して、保護者支援の意義及び具体的内容についての考察を行った。保護者を対象としたアンケートの結果から、本グループにおける保護者支援の一定の効果が示唆された。また、保護者グループと子どもグループとの情報共有と連携、及び必要に応じて個別な支援を行うなどのきめ細かいサポート体制が重要であることが指摘された。

Keywords : グループプレイセラピー 保護者支援

1. はじめに

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder) をはじめとする発達障害のある子ども達との関わりで課題となるのは、彼らが示す「わかりにくい」特性であろう。発達障害は目に見えない障害であり、「わがまま」「自分勝手」「親のしつけがなっていない」「ちょっと変わった子ども」「集団でトラブルを起こす子ども」等の誤解を生じやすい。また、ASD児・者と共に生活を送る家族は、彼らが示す特性に対する理解の難しさや対応への戸惑い等により日常的に高いストレスにさらされているとされる(柳澤, 2012)。発達障害のある子どもの保護者への支援は子どもへの直接的な支援と並んで非常に重要である。本論では、愛知教育大学発達支援相談室における保護者支援、特にグループプレイセラピーという集団での保護者支援について考察を行いたい。

2. グループプレイセラピーの概要

愛知教育大学発達支援相談室は、昭和47年(1972年)に障害児治療教育センターとして発足し、平成21年(2009年)の学内再編統合に伴い、教育臨床総合センター発達支援研究部門の下位組織「発達支援相談室」として再スタートした。相談室では、発達障害をはじめとする障害のある幼児、児童、生徒に対する教育に係る研究活動、教育事業及び相談活動を実施している。相談活動については、子ども達の様々な問題に対する個別のプレイセラピーが中心である。

しかし、発達に問題を抱える子どもの中には「大人とかかわる時には良いが、子ども同士だと難しい」「子ども同士でトラブルが多い」「集団活動が苦手」などの難しさが見受けられ、子どもの保護者からも集

団への適応の難しさが聞かれることが多い。こうした課題に対して、個別のプレイセラピーに加えて小集団での活動が必要と考え、発達支援相談室では2009年12月より「集団活動の難しさ」を抱える子どもを対象とした、グループプレイセラピーを開始した。

グループプレイセラピーについて、参加する子どもは、通常の学級あるいは特別支援学級に在籍しており、発達障害の診断を受けているか、もしくは発達障害の傾向を指摘されている。現在参加している子どもは、ほとんどが自閉症スペクトラム障害(高機能自閉症・アスペルガー症候群など)の特性を持っている。毎年10名前後の子どもが参加しており、2014年度の参加対象児の年齢層は小2～小5である。子ども達がグループに参加している間、保護者は別室に集合し、保護者グループの活動を実施している。

3. グループプレイセラピーにおける保護者支援の意義

発達支援相談室におけるグループプレイセラピーは2009年12月より活動を開始したことは既に述べたが、開始当初より保護者対象の活動を実施していたわけではなかった。教員および学生セラピストは子どもへの支援中心に活動しており、保護者は別室で終了まで待っていただくようになっていた。その時間には、保護者同士で雑談や情報交換等を行っており、こうした時間も保護者同士の関係を形成していく上ではある程度の意味があったと考える。しかし、筆者をはじめとするグループプレイの関係者の中では、保護者だけではなくスタッフが参加する必要性を強く感じていたこともあり、2010年度の活動からはスタッフ(教員・セラピスト)が保護者グループの中に入っていくこととした。

この保護者グループについて、筆者は「親の会」としての場であると考えている。障害児の親の会は、障害種別に様々な場所で活動を行っており、中には規模も大きなものがある。そうした親の会と比べると、本グループはいわばインフォーマルな親の会と言えるだろう。佐々木(2009)は、親の会のようなインフォーマルな支援グループについて、公的な支援が行きとどかない狭間の存在であり、発達障害児者やその家族への支援として、彼らが集う機会を設けたり、相談に応じたりするなど実際の機能を果たすとともに、彼らへの支援の必要性を社会に啓発してきたと指摘している。

なお、親の会のねらいについて、吉川ら(2012)は、①母親が子どもの行動を幅広い視点から捉えられるように子どもの理解を深める、②親同士がお互いの悩みを共有したり、子どもの成長を喜べるような繋がりを深めることで母親の受容体験を図る、という2点があると述べている。本グループでもこのような目標のもとで保護者支援を実施しているが、以下ではその具体的な内容について紹介をしたい。

4. 保護者支援の内容

グループプレイセラピーは毎年5月に活動を開始し、翌年の2月に年度の活動を終了するが、5月のグループ開始時に、保護者を対象にアンケートを実施している。質問項目は①「子どもとの関わりの中で難しいと感じること、困っていること」、②「保護者グループで話し合ってみたいこと、知りたいこと」の2点である。なお、この②「グループで話し合ってみたいこと、知りたいこと」について、実際のアンケートからは、以下のような回答が得られている。

- ・進路について
- ・子どもに有用な訓練について
- ・感情のコントロールについて
- ・話が通じ合うためにはどのような工夫をすればよいか
- ・人との関わりをどうフォローしていけばよいか
- ・家族にどのように協力してもらっているか(父親と子どもの関わり方など)
- ・通級指導ではどのようなことを行っているのか
- ・同じような子どもを持つ母親の困っていること、どう乗り越えていったかを聞きたい

これら保護者の要望全てに答えていくことは難しいが、本グループでは、限られた回数の中でなるべく多くの保護者に有意義となるような時間を設定している。

なお、本グループでは以下の活動を実施している。

- ①グループディスカッション
- ②ペアレント・トレーニング
- ③子どもグループの観察

1) グループディスカッション

担当教員がファシリテーターとなりグループでのディスカッションを実施している。ここで留意することは、時折専門的なコメントを加えながらも、母親達の仲間意識からもたらされる感情の高まりに水をささないよう、ファシリテーターとしての役割に徹するという点である(吉岡, 2014)。

障害児の母親が抱える悩みについて、個別相談の場ではオブラートに包まれがちな母親達の熱い思いが語られる。障害内容や学年にばらつきがあるものの、同じグループ内で子どもたちが一緒に活動していることもあり、他の母親との交流や意見の交換が活発である。そのため、他の母親の取り組みや発言から影響を受け、自身の養育行動や関連する取り組みについての考えが変化することがある。親の会は発達障害の子どもを持つ保護者にとって重要な体験を提供することが示唆され、その体験の多くは保護者同士の交流から生まれるものと考えられるため、セラピストは保護者の交流を積極的に促していく姿勢が必要である(吉川他, 2012)。

保護者グループにおけるディスカッションでは、ウォーミングアップや雑談の時間を設けて参加者が安心して話せる雰囲気作りが重要である。特に、グループの初期や初参加者においては、何を話せば良いか分からないなどの問題が見られるため、設定した話題について、「何を語るかが求められているのか」分かりやすい教示や話題の出し方をする、また経験者に先に話をしてもらい、流れを作った上で、参加経験の少ない参加者に話を振っていく、などの配慮も必要となる。時には特定の保護者のみが話しすぎることもあるが、参加者にとって不満が残らないよう配慮しながら、発言の偏りを調整していく保護者の特性を把握し、全体の流れをコーディネートしていくことが重要である。

2) ペアレント・トレーニング

ペアレント・トレーニングとは、発達障害児の保護者への支援の一つであり、子どものスキル獲得や行動上の問題を解決するために親が身につけた方が良い知識やスキルを獲得できるように意図された行動理論に基づくアプローチであるとされる(上野ら, 2012)。本グループにおいても、ペアレント・トレーニングを実施した年度がある。ペアレント・トレーニング実施に関する詳細は小関・飯塚(2011)にゆずるが、ペアレント・トレーニングの結果についてアンケートを実施したところ、子どもの変化については「言葉による主張が増えた」、「他の人の様子をうかがうようになった(動きをみて待てるようになった)」、「自分から“行く”と言って、参加しようとする意思がでてきた」などがあげられた。また母親自身の変化については「声

かけを意識してするようになった(具体例あり)」、「対処方法を自分で考えるようになった」、「環境を整えることを意識するようになった」、「学校との連携を意識して連絡帳を利用するようになった」などが報告された。これらのアンケート結果からは、子どもの行動についてのモニタリング機能と自身の行っている養育行動の意識化、そして変容効果があると考えられる。

本グループにおいて、ペアレント・トレーニングの効果については参加者の自己報告を確認する方法で行った。実際にペアレント・トレーニングの効果をどこでどのように検証するかといった課題を含め、効果測定について今後さらに検討および整理していく必要がある。またグループでの実施は親同士の情報交換の場としての機能を持ち、お互いが刺激しあうことでトレーニング効果や支援効果が上がる可能性が示されている一方で、ターゲットとすべき養育行動の選定が難しい。本グループではシートを用いて参加者のエピソードを整理し、具体例を提示する際に使用することで、より日常への般化可能性を上げる工夫をおこなったが、どの程度の規模までこのような工夫が適用できるのか、集団構成の特徴なども併せて今後検討していく必要があると考える(小関・飯塚, 2011)。

岩坂(2010)は、ペアレント・トレーニングは小集団での体系化したプログラムで子どもの理解と対応の仕方を学ぶとともに、親同士のサポートを行っていくと効果的であると指摘している。本グループにおけるペアレント・トレーニングについても、一定の効果があったものと思われる。

3) 子どもグループの観察

本グループにおいて、あまり実施することはないが、教員も同席の上、子どもグループ活動中の様子についてマジックミラーを通して観察することも活動の一つである。リアルタイムで活動の様子が伝わってくるため、子どものできること・できないことが保護者には見えやすい。目の前で実際に行われる子どもとセラピストとの関わりを通して、子どもにとっての療育活動の目的・必要性の理解を促すこと及び、家庭や学校での対応の仕方を具体的に伝えていくことが重要な役割である。なお、Negativeな行動に目が奪われがちな保護者に対するフォローが特に必要である。

5. 2014年度の活動について

グループプレイセラピーの活動は大学の休業期間を除き、前期と後期に分けて実施される。前期終了時点で、参加者へアンケートを実施した。アンケートでは、「グループの活動について」「保護者グループについて」それぞれの満足度について、(満足・やや満足・やや不満・不満・よくわからない)の5段階で評価を行ってもらい、グループの活動に関する気付きについ

て自由記述で回答を求めた。以下にその結果を記す。

①グループの活動について

満足……4名

やや満足……1名

②保護者グループについて

満足……3名

やや満足……2名

③グループの活動についての気付き(自由記述)

- ・子どものグループ活動について、どのような変化があるのかを参考にしていきたい
- ・学校でコミュニケーションスキルを身につけて欲しいと言われており、何か良い方法があれば教えて欲しい
- ・子ども同士の関わりに入っていく、自己主張できるような活動を希望する
- ・他の母親からの体験談も参考になるが、教員からの答えがもっとあると良いと思う

①, ②のアンケート結果からは、子どもグループの活動及び保護者グループの活動について、保護者はポジティブな評価をしていることが窺える。グループプレイセラピーにおける保護者支援に関する研究からは、親の会にポジティブな評価を持っている保護者は、グループについても子どもが自由に振る舞える場所、自信をつけさせてくれる場という認識があることが明らかになっている(吉川他, 2012)。実施回数は少ないものの、本グループにおける保護者支援は一定の効果があるものと思われる。

③自由記述の中で、グループディスカッションにおいて教員からの答えをもっと聞きたいとの意見があった。このような保護者からの要望に応じていくことは、今後の課題であろう。

6. おわりに

本グループの保護者支援におけるいくつかの留意点等について述べてきた。その他の留意点として、まず子どもグループとの情報共有と連携の重要性があげられる。保護者グループに参加する担当教員が、子どもグループにおける個々の子どもの状態やグループ全体の進行状況を把握しておくこと、また保護者グループの進行状況や現在の親の悩みや関心事、子ども理解の状態などを子どもグループ担当者と共有しておくことが重要である。

高機能自閉症・アスペルガー症候群の子ども達の家族への支援について、宋ら(2004)は、親の会において実際のサポートが得られるほど、育児に対する負担感が小さくなると指摘した。他者とのコミュニケーションが困難な我が子に対して、母親自身が子どもとどのように関わっていいのか困ることが多いため実際のサポートを必要としている。そのため、コミュニ

ケーションに問題を持つ子どもの母親には、母親同士の繋がりに加えて、母親がどのように子どもの行動を理解していけばよいのかという、子ども理解を促進する援助も必要と考えられる。

村田(2010)は、発達障害の子どもを育てることの課題について、まず家族が障害をネガティブな見方でしたなかなか受け止めきれないということを述べている。家族、本人が障害であるということを認めた時、どこか社会から取り残されたような不安と付き合いながら、家族、本人共に一つ一つの過程を経て生活を組み立て直すような作業工程も多少必要であり、そこには信頼できる支援者との出会いが必要となる(村田, 2010)。

グループプレイセラピーにおける保護者支援について、まだいくつか検討すべき点があると思われる。相談室では個別カウンセリングも実施しているが、必要に応じて個別的な支援(個別カウンセリング・コンサルテーション等)を行うことも求められる。こうしたきめ細かいサポート体制について、今後検討していく必要があるだろう。

引用・参考文献

- 1) 針塚進・遠矢浩一(2006) 軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシヤ出版
- 2) 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子(2004) 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと家族への支援に関する研究—親のストレスとサポートの関係を中心に 自閉症スペクトラム研究 第3巻 pp.11-22
- 3) 小関真実・飯塚一裕(2011) 発達障害の子どもをもつ母親への支援 —グループでのペアレント・トレーニングを通して— 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 創刊号 pp.155-158
- 4) 飯塚一裕(2011) 小集団でのプレイセラピーにおける発達障害児への支援について 愛知教育大学研究報告(教育科学編)第60輯 pp.27-31
- 5) 水内良子・麻生真愛・森本文子・遠矢浩一・針塚進(2010) 発達障害児の集団心理療法における“親の会プログラム”九州大学総合臨床心理研究 第2巻 特別号 pp.155-158
- 6) 吉川桃子・遠矢浩一・針塚進(2012) 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」における「親の会」の意義と課題 九州大学総合臨床心理研究 第4巻 pp.77-85
- 7) 岩坂英巳(2010) 家族を支援する 臨床心理学 増刊第2号 pp.141-147
- 8) 村田昌俊(2010) 発達障害児の親として生きる 臨床心理学 増刊第2号 pp.106-110
- 9) 佐々木全(2009) 発達障害児(者)に対する、インフォーマルな支援グループの取り組みに関する検討 発達障害研究 第31巻 第2号 pp.125-134
- 10) 上野茜・高浜浩二・野呂文行(2012) 発達障害児の親に対する相互フィードバックを用いたペアレントトレーニングの検討 特殊教育学研究 第50巻 第3号 pp.289-304
- 11) 柳澤亜希子(2012) 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性 特殊教育学研究 第50巻 第4号 pp.403-411
- 12) 吉岡恒生(2014) 発達相談とつなぐこと —乳幼児期～就学— 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 第4巻 pp.123-130